

## 運命の分かれ目

「歴史的な」EU 首脳会議は、ユーロ圏の債務危機を収束する大転換期になるよりも、これまでの首脳会議と同様、危機の収束の困難さを一層印象付ける結果になった。首脳会談後の市場の反応はそう語っている。

となると今後も債務危機の渦中のイタリアなどの国債の利回りは高めに推移し、ユーロの為替レートも基本弱含み基調で、ドルの方向性に左右されながらだらだらと推移するのだろう。

世界の関係者が注目していた EU 首脳会談だが、中でもジョン・コーザインはどのような心境だったのか。

前ゴールドマンザックスの共同 CEO だったコーザインは上院議員など経て、MF グローバルを率いた。そこでユーロ圏諸国の国債などをしこたま買った。そして MF グローバルは破綻した。

ゴールドマンの共同 CEO だったハンク・ポールソンとの権力争いに破れ、ゴールドマンを去った。ライバルはその後米国財務長官になった。自分は政界に進出したが満足のいく仕事はできなかった。ライバルは金融危機の対応で評判を落としたが、それでも差は開いたままだ。コーザインは MF グローバルに最後にチャンスかけた。MF グローバルをゴールドマンなどに匹敵する金融機関に育てようとの野望を持った。

とにかく大きな利益が必要だ。利回りの高騰しているユーロ圏の債券は絶好のチャンスだ。トレーダー出身のコーザインは、金融危機が成り上がるチャンスであることを知っていた。メキシコの金融危機、欧州通貨危機、ロシア金融危機など、こうした時に大もうけをした者が組織内で力をつけ、組織も次のステージに進むきっかけになった例をいやと言うほど見てきた。

だがそこはトレーダーの墓場でもあった。ポジションを作るタイミングや切るタイミングがずれると途方もない損失が待ち構えていた。

コーザインも、もっとひきつけて買っていたら大儲けできていたかもしれない。ポジションを投げる時、ジョージ・ソロスが一部引き取ったと言われる。いい買い時と思ったのだろう。

人間も動物も追い込まれてストレスが増えると大きなリスクを取る傾向があるとの研究がある。コーザインも相当追い込まれていたのかもしれない。

米議会の委員会で、MF グローバルの顧客からの預かり資産がどうなっていたのかまるで知らないと答える MF グローバル CEO の姿は寂しいものだった。